

法華經の梵語写本 発見・研究史概観¹

石 田 智 宏

1. はじめに

近代仏教学における法華經の研究は、1820年代初頭にホジソンが近現代人として初めて法華經の梵語写本を蒐集したことにはじまり、その後今日まで二世紀近くの年月が経過した。この間、とくに19世紀から20世紀はじめにかけて、イギリス・ロシアの現地駐在官による収集活動や、フランス・ドイツやわが国の大谷探検隊など各国の探検隊によるシルクロード周辺の遺跡の発掘調査により、多くの法華經の梵語写本がその姿を現わした。その後、1931年にインド・パキスタンの国境付近のギルギットにおいて写本が発見されたのを最後に、まとまった形の写本の発見は終わったかと思われたが、1996年以降、再びアフガニスタンから多くの仏典写本が現われ、前後して中国・ロシアに眠っていた写本もその姿をあらわしはじめている。

これまでに発見された法華經の写本は、完本から断片まで夥しい数にのぼり、その推定書写年代はおよそ5(または6)世紀から19世紀に亘る各時代に及ぶ。発見地は、最初の発見地であるネパールのほか、チベット・中央アジアやギルギット・アフガニスタンという広い範囲にまたがり、法華經は古代仏教文献が発見されたほとんどすべての地域で発見されているといってよい。これらの写本は、発見されると世界各地に送られ、あるものは当初の所蔵地で、あるものは場所をかえて、現在も世界各地に収められている。

1 本稿は、平成17年10月21日に身延山大学で開催された第58回日蓮宗教学研究発表大会における、身延山学園創立450周年記念特別部会での講演を再構成したものである。

ところで、各写本に関してこれまでに出版された書誌情報や研究成果は膨大な量にのぼり、それらを渉獵する手引きとなるものはあるが²、写本の発見と研究の足跡を歴史的に辿り、概観したものは少ない³。とくに中央アジアから出土した写本に関しては、専門家でも各写本の詳細を把握しきれない状況が続き、最近になってようやく過去百年にわたる発掘情報の全体像が整理・把握できるようになってきた。したがってこの分野に関しては、これまでの書誌情報にかなりの修正が必要になっている⁴。そこで本稿では、法華經梵語写本の発見と研究の歴史を概観し、平易な解説を試みたい。

2. 写本の分類

研究史に現われる写本の理解のために、出土地などによる法華經の梵語写本のおおまかな分類を示しておく⁵。

- I. ネパール写本
 - a. 貝葉本（11世紀～）
 - b. 紙本（18/19世紀～）
- II. ギルギット写本（7世紀～）
- III. 中央アジア写本
 - a. 古写本（5/6世紀）
 - b. カシュガル本系
 - c. ギルギット＝ネパール写本近似本
- IV. アフガニスタン写本

2 Yuyama (1970). これ以降更新された情報については、Yuyama (1987); 塚本(1986); 戸田 (1997) などがある。研究論文目録としては、Mochizuki (1998) がある。中央アジア写本の研究については、Nakamura (1980): 184-5, n. 7があったが、最新のものはWille (1998): 241, n. 2 の諸論文を参照。写本の系統について意識を喚起したものに、古くは渡辺 (1970) がある。

3 岩本 (1962); Bechert (1972); Bechert (1973); 金倉 (1978); 湯山 (1998) : 32ff; 蔣(1999)。

4 Yuyama (1970) : 20ff.; 山田 (1959) : 93-94; 望月(1983): 54などの中央アジア系写本に関する部分。Yuyama (1970)の情報は、湯山自身により随時修正されており(湯山(1972): 5(3); Yuyama/Toda (1980); Yuyama (1987) など)、いかに中央アジア系写本の情報が得にくく、全体像の把握が困難であったかが想像される。

5 戸田 (1997):16.

法華經の写本は、その出土地から4つのグループ、すなわち、Ⅰ. ネパール写本、Ⅱ. ギルギット (カシミール) 写本、Ⅲ. 中央アジア写本、Ⅳ. アフガニスタン写本、に分類される。

Ⅰ. ネパール写本に含まれる写本は、11～19世紀に書写されたものである。他のグループのものに比べて時代の下った写本であるが、ほとんどが完本であり、以下に述べる校訂本や多くの現代語訳の底本となったために近・現代に最も影響を与えた写本グループである。チベット発見の写本もここに含まれる。このグループの写本は、大きく a. 貝葉本と b. 紙本とに分けられる。Ⅱ. ギルギット写本は、インドで発見された唯一の写本である。7世紀以降の書写とされ、4系統にわかれる⁶。完本ではないが、全章のおよそ80%をカバーする⁷。ネパール写本の一部と同系統と考えられるが⁸、ネパール写本に比べて極めて古いため、重要な写本である。このギルギット写本をネパール写本の一部とひとまとめにして扱うときには、ギルギット＝ネパール写本 (またはネパール＝カシミール写本) と呼ぶ⁹。Ⅲ. 中央アジア写本は、a. 古写本、b. カシュガル本系、および c. ギルギット＝ネパール写本の読みに近いもの、に分類するのが妥当であろう¹⁰。これらについては次節(2)で詳しく扱う。

Ⅳ. のアフガニスタン写本 (バーミヤン近辺で発見したとされるが、厳密な

6 von Hinüber (1982): ix-xvi.

7 詳細は、Watanabe (1972/75), Part II, pp. xvii-xviii の一覧表参照。

8 ネパール写本の系統分類は、Toda (1984): 211; 戸田 (1984): (1) - (2) に発表された後、同氏により継続して検証され、戸田 (1997): 15-16 の分類を得るに至る。それによれば、ネパール写本は貝葉本と紙本に分けられ、貝葉本のうち古層に属するものがギルギット写本に近いという。Toda (1985-93); Toda (1994-99). なおネパール写本の年代考証については、Vogel (1974) 参照。

9 前者で呼ぶのは von Hinüber (1982): ix ff. であり、後者で呼ぶのは Baruch (1937): 28 および Bechert (1972): 13ff; Bechert (1973): 23; Bechert (1976): 7 である。

10 戸田 (1997):16 による。戸田はローマ字化の作業段階では、(1) カシュガル本、(2) ファルハドベーク本、(3) 断片類に分けた後、(3) を更に、a. 古断片、b. カシュガル本に類する断片、c. ギルギット・ネパール系に類する断片、に分けており (Toda (1981): lv - lvii)、Klaus Wille はこれによって以下のように分類しなおしている: まず (1) ホータン系と (2) ギルギット/ネパール系に分け、さらに前者を4種、すなわち、a. カシュガル本、b. ファルハドベーク本、c. カシュガル本に類する断片、d. 古断片、に分ける (Wille (1998):242; ; LMS (3): 21; Wille (2001): 47 n. 25)。この場合の a～c は、前頁の分類ではカシュガル本系に含まれる。

発見地は未特定）は、最近になって加わった新発見の写本である¹¹。所有者の名を冠したスコイエンコレクションに含まれる。ただし、現在このコレクション中に発見されている法華經の写本は少数の断片にすぎない。全体としてはギルギット＝ネパール写本に近いが、中央アジア写本に近い読みもあることが報告されている¹²。発見地とされるバーミヤン近辺を所謂古代大ガンダーラ文化圏¹³の一部と考えれば、ギルギットとひとつにまとめることができるかもしれないが、現段階ではこの写本をただちにギルギット写本に分類することはできない。

3. 写本発見・研究史

法華經の梵語写本に関する研究史は、いくつかの時代に区切ることができる。いまは発見と研究の主たる動向によって、以下の6つの時期に区分して概要をまとめてみたい。なお、数十年単位の編年式で扱うが、ひとつの写本に関する発見と出版を連続して扱う場合もあり、切り離して扱う場合もあることを付言しておく。

- (1) 黎明期：ネパール写本発見とケルン・南條校訂本出版期（19世紀）
- (2) 中央アジア・ギルギット写本発見期（20世紀初頭～1935頃）
- (3) ケルン・南條校訂本に対する批判的研究期（1935～50年代）
- (4) 写本整理と影印本・ローマ字本出版期（1950～80年代）
- (5) 再発見・新発見期（1980～2000年）
- (6) 新校訂本出版期（2000年～）

(1) <黎明期：ネパール写本発見とケルン・南條校訂本出版期>（19世紀）

ネパール写本は、法華經の梵語写本研究の扉を開いた写本である。このグループに含まれる写本の数はいわめて多い¹⁴。研究史の嚆矢として、ホジソン将来の

11 Toda (2002); 松田 (1999) .

12 Toda (2002): 69.

13 Salomon (1999): 3.

14 塚本(1986): 63-66.

写本から直接翻訳したビュルヌフのフランス語訳（1852年¹⁵）と、ケルンの英訳（1884年¹⁶）とが出版されている。前者は貝葉本を、後者は紙本を底本としたものである。両書は最初の仏・英現代語訳であり、辞書などの環境の整わない時代のものでありながら、現在でも参照すべき業績である。いっぽう南條文雄はネパール本を中心に校訂本を準備し、ケルンがこれを再校訂して1912年に出版した。この校訂本は出版直後から問題点が指摘されているが（後述）、現在まで定本となっている。

（2）＜中央アジア・ギルギット写本発見期＞（20世紀初頭～1935頃）

わずか30年ほどの間に、最も重要な写本の数々が発見された、法華經梵語写本発見の黄金時代である。

まず、この時代前半に発見された中央アジア出土の写本について述べよう。このグループの写本は、一般に発見者または出土地の名を冠して呼ばれる。完本はなく、断片も多い。古写本とカシュガル系写本との間に、かなりの相違がある。はじめに現存率の高い三つのカシュガル系写本を紹介する。

まず最もまとまったものとして、（イ）9-10世紀の書写とされるカシュガル写本がある。大半がロシアのカシュガル総領事ペトロフスキーによってカシュガルで購入された（1903年）のでこう呼ぶが、出土地はホータンである。後に紹介する大谷写本の中に、より古いホータン出土写本があるので、このカシュガル写本はホータン新版とも呼ばれる。中央アジア出土の写本としては最も現存率が高いが、それでも現存するのは全体の半分に満たない¹⁷。この写本は六つ

15 Burnouf (1852). ホジソンとビュルヌフについては、湯山(1994) および Yuyama (2000) がある。

16 Kern (1884)

17 第1章（序品）～第11章（宝塔品）の途中までは完全に残り（第3-240葉）、その後第15章（涌出品）までの間には欠落部分がある。第16章（寿量品）～第21章（神力品）は欠損部がかなりある。第22章（陀羅尼品）～第26章（羅什訳では第27章本事品）は1/3～1/4が残存。第24章（妙音品）、第25章（普門品）は断片が現存（偈あり）。第27章（勧発品）・第28章（嘱累品）はほぼ完全に残っている。書写年代については LMS (1): 37-38 を参照。

の探検隊、すなわち、ペトロフスキー、トリンクラ、ヘルンレ、スタイン、大谷、ハンティントン、によって分割将来された。¹⁸これは地元民がカシュガルで、ひとつの写本をロシア人、イギリス人、ドイツ人、日本人などに分売したことによる。このような運命を辿った断片同士であるが、1977年になってはじめて、1905年にハンティントンが発見しエール大学に所蔵された写本断片が、大英図書館所蔵カシュガル写本の一枚の断片の右側に接続するべき部分であることが判明したり、断片No. 369 のように本来一葉だったものが三分割され、大谷、ペトロフスキー、スタイン、の三団体に分けて持ち帰られたことが判明したりして、近年ようやく全体像を把握できるようになった。

二番目に多くの分量が残っているのは、(ロ) カダリク出土写本である。これは、グリュンヴェーデル／ル・コックを隊長とするドイツのトゥルフアン探検隊（1904-5、1913-14年）により将来された。近年のヴィレの報告により、この写本はベルリン・ミュンヘン・ロンドン（2カ所）に分散して保存されていることが明らかになった。¹⁹全体としてはカシュガル本に近いというが、²⁰書体よりして7-8世紀のものと考えられ、²¹より古い形を保持した写本である。

カシュガル系の他のひとつは、(ハ) スタインにより発見されたファルハドバーク写本（1906年発見）である。²²5 または6世紀の書写とする説が有力だ

-
- 18 ペトロフスキー写本（393枚）：ロシア科学アカデミー蔵；スタイン写本（Or.9613, 40枚）：大英博物館蔵（この中のNo. 282の半分がハンティントン断片F）；ヘルンレ写本（No. 148, 4枚）：大英帝国カシュガル総領事マカートニー将来、旧インド省図書館蔵；トリンクラ本（9枚）：旧マールブルク所蔵、現ベルリンアカデミー蔵。以上に関する詳細なデータは、LMS (3): 159-167を見よ。当初は行方不明とされたフォリオ142の同定については：BL/T (1965) および Yuyama (1966) を、スタイン写本のカシュガル写本同定については：真田・清田(1961): 121-122、ハンティントン断片については、Yuyama/Toda (1980)、塚本(1986): 74 および湯山(1998): 37ff. を、断片No. 369についてはToda (1981): xii-xiii を参照。トリンクラ（マールブルク）写本の同定については、Bechert (1972) を参照。大谷写本については本文 (b) 参照。なおカシュガル本の、ケルン・南條本との対照表は Toda (1980) を、他の中央アジア諸写本との対照表は LMS (3): 168-183 を参照。
- 19 トゥルフアンコレクション（ベルリン）、フランケ／ケルヴァーコレクション（ミュンヘン）、ヘルンレコレクション（ロンドン）およびスタインコレクション（ロンドン）に収められている。ほぼ全章にわたる断片である。LMS (3) に詳しい。
- 20 LMS (3): 21-22.
- 21 LMS (3): 15.

が、(イ)のカシュガル本によく似ていることから、戸田は9—10世紀まで下
がると見ており、書写年代は定説をみるに至っていない。ちなみにカシュガル
写本が「提婆品」を独立した一章とするのに対し、この写本は提婆品相当部分
を含まずに前後が連続している（「提婆品」の有無については第四節参照）。

以上の三写本に対して、より古い写本を含むコレクションが(ニ)大谷探
検隊(1902-14)将来写本である。いわゆる大谷写本で、多くの章にわたるが
すべて断片である。旅順博物館蔵45断片と龍谷大学蔵2断片よりなる。前者は
ホータン出土の38断片とカシュガルで発見された7断片に分かれる。ホータン
出土写本は5乃至6世紀の書写とされ、ホータン旧版とも呼ぶ。第二節の分類
で III. 中央アジア写本の a. 古写本にあたり、現存する法華經写本の中で最
古層に属する。長いあいだ所在不明であったが、近年再発見され、公刊された
(旅順博物館蔵写本、後述)。カシュガルでの発見分は(イ)カシュガル写本の
一部である。

以上の写本のはほとんどは、後に写真版・ローマ字本として出版されている
(以下の(3)～(5)に詳説)。

さてこの期には、中央アジア写本とは異なった系統の比較的古い写本もギル
ギット北方より出土している(1931年)²⁵。いわゆるギルギット写本である。概
略は上記第二節に述べたとおりで、出版については後述する。

20世紀はじめのこの時期は、以上のように中央アジア・ギルギット写本の発
見に彩られているが、研究史の上では、河口慧海がチベットのシャル・ゴンパ

22 旧インド省図書館蔵、35葉。第11章（見宝塔品）の途中から第15章（寿量品）の冒
頭までに相当する。写真はスタイン蒐集写本としてマイクロフィルム化されたほか、
本田本に収録され、ローマ字本は一部がブサンにより、後にすべてが戸田宏文によ
り公表された。本田(1949)；Poussin(1911)；Toda(1978)。このスタイン写本は、
これらによってひとまず参照できる状態となったが、その写真は判読しにくいもの
であった。これに関して辛嶋清志が、最近始まった大英図書館梵語写本デジタル化
プロジェクトの一環として、美しいカラー写真を添えた再校訂作業を始めている：
Karashima(2006a)。書写年代については、Mironov(1927):263；Yuyama(1970):
22；Toda(1981):lv；塚本(1986):72を参照。

23 LMS(1):32；真田(1961):53-71。

24 LMS(1):37-38。

25 発見の事情は Dutt(1939):i-iv；渡辺(1967):76-79；渡辺(1974)に詳しい。

寺から齎したネパール写本にも触れておきたい。この写本は1926年に河口と池田澄達により写真版が出版され、²⁶後に戸田宏文によりローマ字化された。²⁷荻原・土田校訂本がケルン・南條本と対校した写本であり、もっとも古いネパール写本のひとつである。²⁸

（3）＜ケルン・南條校訂本に対する批判的研究期＞（1935～1950年代）。

この時期には写本の発見が一段落し、これまでに発見された写本に対する研究が続々と発表された。この時期を象徴するのは、バルッフによるギルギット写本研究である（1938）²⁹。彼はその中で、ケルン・南條校訂本がもつ問題点を指摘する。この問題は、現在に至るまでの法華經梵語写本研究のキーポイントとなるので、少し説明を加えよう。

ケルン・南條本は、基本的に南條が6種類のネパール写本と、フーコーが出版したテキストを交合してその草稿を準備したものである。しかし写本は、出土地域が同じであってもそれぞれに独自性を持つものであり、系統を同一にするとは限らない。南條が用いた6種のネパール写本のうち、底本としたアジア協会蔵本（A=R）はその他5種の写本と別系統であったため、両系統を交合した草稿は奇妙なテキストになった。さらに問題を悪化させたのは、これを最終チェックしたケルンが、当時発見されて間もなかったカシュガル本を、注記せずに再校訂に取り込んでしまったことである。カシュガル本はネパール写本とは全く系統が異なる伝承を遺すものであったから、結果として全く存在しない形の法華經ができあがり、バルッフはこのことを批判したのである。³⁰

26 Kawaguchi/ Ikeda (1926)

27 Toda (1980-85)

28 Wogihara/ Tsuchida (1934-35)

29 Baruch (1937)

30 Baruch (1937): 7 - 12. 同様の批判は、渡辺 (1966): 255-258; Bechert (1973): 25-26ほかにも指摘される。

31 Lüders (1916)

これに関してはリュードースの論文が興味深い証拠となつて残っている。³¹ 彼はその論文で 5 枚のカシュガル写本を紹介するに際し、南條によるネパール写本校訂本の、出版前の草稿を借用しているが、それは1912年に出版されたケルン・南條本とは異なっていた。そのことにヘルンレが気づき、注記したのである。³² リュードースが南條の草稿を借用した時点では、その原稿はケルンがカシュガル本を用いて再校訂する前で、ネパール写本のみで校訂されていた。このような事情で、このリュードースの論文はケルン・南條校訂本出版以前の、少なくともネパール写本のみによる南條の校訂草稿の姿をとどめており、重要なものとなっている。

以上のように、ケルン・南條校訂本はその出版当初から問題点が意識されており、これを多少とも改善すべく新たに3種の校訂本が出版された（荻原・土田本、ダット本、ヴァイディヤ本）。しかし、いずれもケルン・南條本をベースにしており、根本的な問題点は解決されなかった。³⁴

ちなみに、これらの校訂本のうち重要なのはダット本で、注記に含まれていたミロノフの整理した中央アジア本のノートが貴重な資料となっていた。その中央アジア写本の典拠が具体的にどの写本なのか、長年不明だったのであるが、1997年に、その典拠はスタインコレクション（大英図書館蔵）と大谷写本（旅順博物館蔵）であることが判明した（後述）。³⁵ ミロノフはこれらの写本を整理した経験から、中央アジア本のみに関してもいくつかのグループに分けるべきだということを、すでに1927年に表明している。³⁶

32 Lüders (1916): 143-4, note.

33 Wogihara/ Tsuchida (1934-35); Dutt (1953); Vaidya (1960).

34 湯山 (1998): 41. ケルン・南條本に関する最新の論考として、小槻 (2005) がある。

35 LMS (1): 40, n. 7. 大谷探検隊の西域調査(1902-14年)のうち、中国新疆省各地にて収集・将来された写本はロシア人ミロノフによって整理された後、1929年に関東庁博物館（旅順）に譲渡された。その後、第二次大戦後の混乱により、その存在を知られながら保存場所・状態などが不明になっていた。1989年以降、蔣忠新（中国社会科学院）が再発見した。ミロノフ発見の法華經写本は38断片であったが、蔣忠新により45断片あることがわかった。

36 Mironov (1927); Bechert (1972), p. 76.

ところでこの時期の業績としては、我が国における研究も見過ごすことはできない。前節（2）の時期に中央アジアやギルギットから出土した法華經は、我が国の関係者の渴望するものでもあった。本田義英・出口常順は1949年に、大英博物館、インド省図書館（ロンドン）、ベルリンおよびギメ美術館（パリ）の4カ所に所蔵される両地域出土写本の写真を掲載した影印本を出版した。これは写真の精度がよいとはいえないが、当時としては渴望を癒すものであったにちがいない。³⁷ いっぽう西域文化研究会では、これに含まれないロシア東洋学研究所蔵カシュガル本のマイクロフィルムを入手し、また大谷探検隊将来の一部の写本を整理するなどして、真田有美や清田寂雲がその研究成果を1961年に公表している。³⁸ 中央アジア・ギルギット出土写本については、このほかにも本田・真田・清田や小島文保など我が国の諸先学の研究も多く、いかに関心が高かったかを示している。³⁹

（4）＜写本整理と影印本・ローマ字本出版期＞（1950～1980年代）

この時期を特徴づけるのは、辞書・目録・索引などの参考図書（工具書またはリファレンス類）、および写本の影印・ローマ字転写本の出版（およびその準備）である。それまでに発見された諸写本を比較研究する環境が整い始める、写本研究の第二世代といえることができる。

まず参考図書として重要なのは、1953年のエジャトンによる仏教混淆梵語文法・辞典の出版と、1970年の湯山明による法華經目録（湯山目録⁴¹）である。前者は、法華經を含む多くの初期大乘經典が書かれたところの、仏教梵語の言語

37 本田（1949）

38 カシュガル本については真田・清田（1961）、大谷探検隊将来写本については真田（1961）参照。なお、後者のうち当時確認しえたのは断簡2枚である。その他については、旅順博物館に所蔵されていたことが後に判明した（後述）。LMS(1) 参照。

39 岩本（1962）：399-405 および Yuyama（1970）：20-36 の各写本研究書の項参照。

40 Edgerton（1953）. 利用には辻（1970）と、同書注2、注3というルナー、ブラフ他の書評が有益である。

41 Yuyama（1970）

的特徴について整理した基本図書である。言語学的研究が進むにつれて本書の問題点が指摘されるようになったが、研究者の被った恩恵は大きい。後者は、法華經の写本研究の一つの節目に位置づけられる。というのはこの後、写本の系統分類という意識を持つべきであるというそれまでの指摘にもとづいて、その意識のもとに影印本・ローマ字転写本出版が始まるからである。中国の大蔵經開版に先立って、各時代に經録が編纂されている例が示すように、目録作成という作業はその後の出版活動の指針となるのであり、湯山目録がその後の写本の影印・ローマ字本出版の先達となったとって過言ではない。見方を変えれば、多くの写本が出揃い、整理の機運が高まるのをうけて、目録が作成されたということもできよう。

また、その出版は次の時代を待たねばならないが、法華經原典研究会によるケルン・南條本法華經の索引出版の準備作業がこの時代に始まっている。その作業は梵・藏・漢索引、藏・梵索引、漢・梵索引として結実し、後に研究者を大いに裨益することになる。⁴²

ところで、写本の発見と並行しながら研究していた前時代は、それぞれの写本を部分的に研究しはじめた段階であったが、この時期にはその整理が進み、20世紀初期に発見された諸写本の写真版・ローマ字化が一気に進んだ。まず、1931年発見のギルギット写本について、1972年に影印本、1974年にファクシミリ写真版、そして1975年に前者のローマ字本が出版されている。⁴³ギルギット写本については、後にこれと系統を異にする写本も発見され、1974～82年にかけて写真版・ローマ字本が出版されている。⁴⁴中央アジア写本については、1972年のベッヘルトのカシュガル写本諸本の研究と1976年のカシュガル写本の影印出

42 Ejima (1985-93); Ejima (1998); Asano (2003). なお荻原・土田本の索引も前後して出版された: Itoh (1993).

43 Watanabe (1972/75); Vira/ Chandra (1974).

44 Gilgit (B), (C) とされるものについて、影印版はVira/ Chandra (1974)、ローマ字本はToda (1979). Gilgit (K) の影印版・ローマ字本は、von Hinuber (1982). 1956年にトウッチが発見したのはGnoli (1987)に影印版があり、Toda (1988)がローマ字化している。

45 Bechert (1972)

版、⁴⁶1977-79年の戸田によるカシュガル写本のローマ字本出版および同時期の
ファルハドベーク写本のローマ字化⁴⁸がある。カシュガル写本影印版は、先に述
べた大谷写本、ハンティントン写本以外の、4カ所に分散した写本を集め、利
便性を高めている。⁴⁹

この時期の動きとして、写本の蒐集をひとつの柱とする法華經文化研究所が⁵⁰
1966年にスタートし、1977-82年にかけて梵文法華經写本集成⁵¹が刊行されたこ
とは重要である。これは、31種の写本の、ケルン・南條本の一行ごとに対応す
る部分を切り貼りし、さらに2種の刊本に対応させたものである。続いて同集
成のローマ字本化が計画され、第2巻まで出版された。⁵²中断されているのは、
この種の計画の難しさを示すものであろう。

(5)＜再発見・新発見期＞（1980～2000年）

この時代には、すでに発見が報告されていながら所在不明となっていた写本
が再発見され、また新たな写本も発見された。情報が整理され、法華經梵語写
本の全体像が明らかになってきた時代である。

再発見された写本としては、1970年の湯山目録の時点で不明だった完本の民
族文化宮図書館所蔵写本が1984年コロタイプ版で出版され、1988年にローマ字
本が出版された。⁵⁴同様に、ペトロフスキー・コレクションに含まれる未公開写

46 Chandra (1976)

47 Toda (1977-78)

48 Toda (1978)

49 Chandra (1976): 3-9 (forward by H. Bechert); Bechert (1972): 22-27.

50 季報「法華文化」は1967-75の間に28号を数え、内外に所蔵される写本の情報を紹介し、後にその任を『法華文化研究』誌に譲った。

51 SMS. CD-Rom 版: DLSM. Web 版: sdp. chibs. edu. tw

52 SMSR I, II.

53 ラーフラ・コレクションの一写本である。MLB (1984). Web 版: www. rism. cn

54 MLB (1988); Toda (1989-91).

55 *Bibliotheca Buddhica*, XXXIII, Moscow 1985; *Bibliotheca Buddhica*, XXIV, Moscow 1990; *St. Petersburg Journal of Oriental Studies*, vol. 5, 1994. 上記三文献に、未公開のペトロフスキ写本が計94葉、影印版とローマ字本として公開された。Cf. BL/ VD (1986).

本が、1985～94年の間に St. ペテルスブルクから出版された⁵⁵。また、20世紀初頭に大谷探検隊が発見・将来した大谷写本が旅順博物館に所蔵されていることがわかり、1997年に影印写真版とローマ字本が出版されている⁵⁶。これは1927年にミロノフが整理したにもかかわらず、その後戦乱のために行方不明になっていたものである。

数量としては1断片であるが、フィンランド人男爵マナハイムが齎した写本（1906-8年発見）も、近年再発見されたもののひとつである。これを探し出したヴィレによれば⁵⁷、この書写年代は7-9世紀と考えられ、ギルギット・ネパール系の読みに近い形を保持するという。

新発見の写本としては、旧ソ連のアフガニスタン侵攻とその後の内戦の中から大量に現われた仏教写本群（スコイエンコレクション⁵⁸）に含まれるものを挙げることができる。このコレクションに法華經の断片が確認されたのは1998年から99年にかけての冬で、このとき7片の断簡が見つかった。その後マーケットに現われた断片の数は増え続け、2002年までに見つかった法華經の断片は44を数えるまでになった。今後この数はさらに増えると思われる。この写本は、字体からして5世紀前後に書写された可能性があると考えられる。

上記旅順博物館所蔵の大谷写本とスコイエンコレクションとは、世界情勢の変化によって再び、あるいは新たに日の目を見ることになった写本である。両者に含まれる法華經の写本に関して注目すべき点は、双方ともこれまでに発見・研究されてきた梵文写本の中で最古層に属することであり、断片ではあるが法華經研究に重要な情報を加える資料となった。

近年、これら再発見・新発見の写本のほかに、旧知の写本の影印・ローマ字

56 LMS(1). 再発見前のミロノフのノートは、暫定的にアジア協会本（Dutt (1953)）に採用されているが、この時点ではミロノフのノートの底本の正確な情報は未確認だった。再発見の顛末は序文参照。

57 Wille (2001). Cf. Yuyama (2001).

58 Toda (2002b). 44断簡。樺皮と貝葉。1, 2, 3, 8, 10, 13, 14, 18, 20, 22, 23, 25, 27 各章の一部。

本が相次いで出版されている。⁵⁹ その一部は、ネパール系写本のなかで最も古層に属し、誤植が少なくよい読みを保存している。⁶⁰ これらは、影響力のあったネパール写本のローマ字化の必要性を説いていた戸田の主張が実現された例である。

（6）＜新校訂本出版期＞（2000年～）

ここで、ケルン・南條本以来の懸案であり続けた新校訂本編集に関する最新のプロジェクトと、今後の展望について述べたい。すでに度々指摘されているように、梵本法華經の研究は、一つひとつの写本を正確に解読することからはじまる。そしてすべての写本にわたってこの作業を行うことによって、写本の系統分類が可能となる。この作業に生涯をかけた戸田宏文によるネパール写本・中央アジア写本の解読研究、⁶¹ および他の先学の研究によって、かなり詳細な系統分類が確定しつつある。第二節冒頭に示した系統分類はそれである。

近年この分類に基づいて、辛嶋静志による新校訂本の編纂が始まった。⁶² この校訂本は、法華經を各節ごとに区切って梵・藏・漢訳を並べたものである。梵語に関しては、ギルギット・ネパール系の校訂版と数種の中央アジア系写本を収録する。前者は、ギルギット写本を底本として諸ネパール写本を交合したひ

59 ネパール国立公文書館所蔵写本（写真版・ローマ字本）：LMS (2-1), LMS (2-2/3); ケルン・南條校訂本に用いられたケンブリッジ写本二本の影印本：LMS (4); 東京大学図書館所蔵河口本のローマ字本：LMS (5)。

60 LMS (2-2) の戸田宏文による序文参照。

61 戸田の2002年3月までの研究は、Toda (2002a) としてCD-Rom化された。これは既に編まれていた論文目録 (Edited by Haruaki Kotsuki with the collaboration of Noriyoshi Mizufune, "A Concordance of Romanized Texts of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra Manuscripts Transliterated by Prof. Hirofumi Toda in Reference to Kern-Nanjio's Edition," 2001. 私家版) の改訂版をも含む。なお、ケルン・南條本と諸写本との対応については、フォン・ヒニーバによる書評 (法華經原典研究会による索引への書評) 中にも対応が記されている (但し印刷ミスがある：254.4: 65,8→56,8; 254.5: 48-95→48-82; 254.10: 1-27→1-26; 254.17: 227,7-10→277,7-10; 254.21: 405,4-421,14→405,4-421,15) : von Hinüber (1995)。

62 Karashima (2003-2005)

とつのテキストを提示し、後者は各写本を並列する。蔵訳は、版本と重要な写本を五種類に分類し、漢訳は三種を用いている。この校訂本は、一冊でローマ字転写本と校訂本の機能を満たす点と、各節ごとに諸テキストを並べ、その比較・対照の便宜を意図している点に特徴がある。完結までにかかなりの年月を要すると思われるが、江湖の期待を担った事業である。

ところで法華經がひとつの經典である以上、校訂本としてはひとつの連続した確定テキストも必要である。より古く、漢訳とも一致する中央アジア系の写本については、辛嶋による校訂本の成果を用いることができるであろう。他方ネパール本については、初期の伝承に誰かが手を加えたものとされるために、⁶³その価値は中央アジア系写本に一步譲るように思われがちであるが、後の法華經伝播の歴史に与えた影響の大きさを見過ごしてはならない。したがって、ネパール写本のうち、辛嶋の新校訂本では参照されるにとどまる写本のうちの重要なもの、すなわち、ケルン・南條本が底本とした紙写本（英国王立アジア協会蔵本）やビュルヌフが翻訳に用いた底本（フランス国立図書館蔵本、パリ・アジア協会蔵本）などは、それぞれのまとまったテキストを作成する必要があるであろう。⁶⁴

4. 梵本と漢訳

羅什訳『妙法蓮華經』（以下『妙法華』と呼ぶ）の信仰と研究の伝統をもつ我が国では、梵本法華經の発見当初より、『妙法華』と梵本との比較対照に注意が払われてきた。しかしケルン・南條本には問題があり、梵語写本の系統分類が十分に行われるまでは、漢訳との厳密な比較は困難であった。それゆえ『妙法華』と梵本の間に不一致がある場合には、⁶⁵羅什による恣意的な加除・改

63 Bechert (1973): 24; Bechert (1976): 6.

64 現状では、本節(1)で記したように、ビュルヌフの仏訳・ケルンの英訳を読むときにそれらが基づいた写本の校訂本がないので、翻訳そのものを検討するのが難しい。

65 『妙法華』と梵本の不一致は、章の構成の相違・部分的過不足・原語と訳語の対応など多岐にわたるが、ここでは触れない。

変とみなされることが多かった。

漢訳と梵語写本の相違が、比較する梵語写本の系統に起因することが認識されるようになってからも、法護訳『正法華經』（以下『正法華』と呼ぶ）と『妙法華』がどの梵語写本と近い関係にあるか、という点についての定説は得られなかった。⁶⁶

しかし最近辛嶋静志は、漢訳と梵本における句の対応を数値化し、『正法華』と『妙法華』はギルギット・ネパール写本より中央アジア出土写本に一致する傾向が強く、とくに旅順博物館所蔵大谷写本とよく一致すること、『添品妙法蓮華經』はギルギット写本と一致することを結論した。⁶⁷すでに固有名詞については、意識にせよ音訳にせよ、『妙法華』はギルギット・ネパール写本より中央アジア写本に近いとされている。⁶⁸したがって、従来『妙法華』と梵本との不一致と考えられていた問題は、ケルン・南條本、ひいてはケルン・南條本が底本としたネパール写本と比較したからであり、中央アジア写本、とくに旅順博物館所蔵写本などの古写本と比較して再検討する必要がでてきたわけである。

このような、『妙法華』がギルギット・ネパール本とは一致しないが、中央アジア古写本とは一致する例として、章の構成に関する問題がある。そのうち『妙法華』とギルギット・ネパール本とが一致しない点として、たとえば塚本啓祥は①提婆品の有無、②薬王品・妙音品・普門品・陀羅尼品の順序③普門品

66 Karashima (1992): 14 が指摘するように、日本人研究者と西洋人研究者の見解は全く異なる。日本人の多くは、両漢訳は中央アジア写本に近いとする。ただし、塚本(1972)などは、『正法華』がネパール・ギルギット写本に基づくという。これに対して、バルッフやベッヘルトは『正法華』を中央アジア写本の系統に、『妙法華』をギルギット・ネパールの系統に属させていた: Baruch (1937): 45; Bechert (1972): 14; Bechert (1973): 24; Bechert (1976): 7. 岩本裕は、はじめ『正法華』をギルギット・ネパール系に、『妙法華』を中央アジア系に近いものとしていたが(岩本(1962): 412の図解)、後には両漢訳を中央アジア系とする(岩本(1974): 16)。ただしその場合でも、『妙法華』の原本の位置は「極めて揺動的」としている。渡辺(1970): 88-89 は、漢訳がどの系統の梵本に近いのかを決めることは不可能であると述べている。

67 Karashima (1992): 253-260; 辛嶋(1997) 参照。

68 Kubo/ Yuyama (1993): 2.

偈の有無、を挙げている。⁶⁹

このうち①に関しては、まず既に、現在の『妙法華』に見られる「提婆品」は羅什が見た『妙法華』の原典にはなかったであろうとされている（現在の形は法献・法意の付加増広による）。これに対して梵本のうちギルギット・ネパール写本では『妙法華』の「提婆品」相当部分は独立しておらず、「見宝塔品」相当部分から連続して一つの章を構成しているが、⁷⁰中央アジアの古写本であるファルハドベーク本には提婆品相当部分がなく、宝塔品（梵本第11章）から勸持品（梵本第11章）に直接連続する。⁷¹このことは既に塚本も確認している。したがって、①提婆品の有無に関しては『妙法華』は中央アジア古写本に近いと考えられるわけである。ちなみに、ファルハドベーク本とよく似るが後代の書写であるカシュガル本は「提婆品」を独立した一章としている。

次に②③に関して、塚本が上述の序文を書いた時点では所在不明だった旅順博物館所蔵本が、『妙法華』と同じ次第をとる点について紹介しよう。

まず旅順博物館所蔵本は ABCD の四類に分けられ、⁷²普門品と陀羅尼品はB写本に収録されている。『妙法華』の当該部の章立ては、薬王品→妙音品→普門品（偈欠）→陀羅尼品であり、『正法華』と共通している。これに対しネパール写本およびカシュガル写本では、陀羅尼品→薬王品→妙音品→普門品である。B写本では、普門品は偈を持たず、陀羅尼品に連続している。⁷³これまで、普門品→陀羅尼品という順序がより古い形であっただろうと推測はされていたが、⁷⁴そのような実例はどの梵文写本にもみられなかった。したがって、B写本はこ

69 塚本(1986): 76-77.

70 提婆品が独立していない例は、ギルギット・ネパール写本のほかにはチベット訳・『添品妙法蓮華經』にある。

71 提婆品を独立した一章とするのは、カシュガル本のほかには『正法華經』（梵志品）のみである。旅順博物館所蔵本の分類についてはLMS(1): 39を参照。

72 A は5世紀、B、C は6世紀、D に含まれるカシュガル写本は 9 または10 世紀の書写とされる。LMS(1): 10-11; 24; 37-38 参照。

73 LMS(1): 11-12; 25-27; 38-40.

74 たとえば田村(1972)。

の構成を示す唯一の証拠となっている。

このように上記①～③問題をめぐっては、『妙法華』は、多くの法華經梵本のうち、現存写本としては最古層に属する中央アジア系写本（5または6世紀）に一致するといえることができる。これは上述の辛嶋の結論、つまり、句の対応に見られる『妙法華』と中央アジア写本の近似性とも符合する。以上を総合すると、『妙法華』は、固有名詞を含む句の対応の点でも構成の点でも、中央アジア写本に近いといえる。⁷⁵

一方、近年の古訳經典全般への関心の高まりによって、法護訳『正法華』に対する関心も高まっている。⁷⁶というのは、達意的翻訳である『妙法華』に比べて逐語的な『正法華』は、梵本と比較しやすいからである。たとえば『正法華』に関しては、その漢文から、もともなったテキストは現存するどの梵語写本より中期インド語的色彩が濃かったであろう⁷⁷というような原語の性質の推論ができる。また逐語訳ゆえに想定しうる原語の音韻表記の特性から、用いられていた文字の推測も可能である。つまり『正法華』は、翻訳とはいえ原文を復元できるほど正確な逐語訳なのである。⁷⁸これまでは一般に、漢訳はあくまで翻訳であり、訳者の説明的解釈が加えられたり意識されたりするために、原文そのままの意を反映しない可能性があると考えられ、梵漢の比較において梵本が偏重される傾向にあった。しかし286年に訳出された『正法華』は、5世紀までしか遡れない梵本より古い原典の姿を極めて忠実に反映していることが明らかになり、厳密に読めば最古の梵本以上に古い原典の姿を保持する、きわめて貴重な資料であることがわかってきたのである。⁷⁹

75 『妙法華』と梵本とを対照した工具書として Karashima (2001) がある。

76 法護訳に関する注目すべき研究として、Boucher (1996)、Nattier (2003)、河野 (2006) などがあり、この分野への関心の高まりを表している。

77 中期インド語とは、仏典が古典梵語で書かれるようになる以前に用いられた言語の総称で、古い仏典ほど中期インド語的要素が強いとされる。

78 Bechert (1972); 辛嶋 (1997): 162-171; 辛嶋 (1998)。

79 『正法華』と梵本とを対照した工具書として Karashima (1998) がある。

旅順博物館所蔵写本を含む、中央アジア出土の古写本の全貌が整理されつつあることは、古訳經典の解読作業にとって幸運なめぐりあわせとなった。5または6世紀まで遡りうるが断片の多い中央アジア古写本（旅順博物館所蔵写本ABC）は、『正法華』により部分的に復元できる可能性があり、『妙法華』とあわせた二つの漢訳が法華經の梵語写本研究に不可欠の資料であることが再認識されている。⁸⁰

5. おわりに

以上、法華經の梵語写本の発見・研究の歴史を辿ってみた。法華經の梵語写本研究においては長い間、全ての写本を正しくローマ字化し、系統分類すること、そしてそれに基づいて新たな校訂本を作成することが懸案となってきた。21世紀を迎えた現在、これまでの研究の蓄積によって写本の系統分類はかなり確定し、新校訂本のプロジェクトが始まっている。今後は並行して重要なネパール写本のローマ字化と校訂が求められるであろう。これらの作業の際には、いままで見過ごされがちであった漢訳の価値を再認識し、十分に活用することが期待される。

写本に基づく文献研究は、最終的には法華經の思想的・歴史的研究に対して信頼に足る基盤を提供するものであるが、同時に、思想研究が写本研究にも示唆を与えこれを資するものであることを忘れてはならない。

80 Bechert (1973): 25; Bechert (1976):8; 辛嶋 (1997)。

略号と参考文献

< 欧文 >

- ARIRIAB: *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University* (『創価大学国際仏教学高等研究所年報』), The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University (創価大学国際仏教学高等研究所), Tokyo.
- Asano (2003): Morinobu Asano et al (eds.), *Chinese - Sanskrit Index to the Saddharmapuṇḍarīkasūtra*, Reiyukai, Tokyo 2003.
- Baruch (1937): Willy Baruch, *Beiträge zum Saddharmapuṇḍarīkasūtra*, Bonn 1937.
- Bechert (1972): Heinz Bechert, *Über die "Marburger Fragmente" des Saddharmapuṇḍarīka* (Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, Philologisch-historische Klasse 1972, no. 1), Göttingen 1972.
- Bechert (1973): Heinz Bechert, "Remarks on the Textual History of Saddharmapuṇḍarīka," in: Perala Ratnam (ed.), *Studies in Indo-Asian Art and Culture* (Commemoration Volume on the 70th Birthday of Acharya Raghu Vira) vol. 2, pp. 21-27, New Delhi 1973.
- Bechert (1976): Heinz Bechert, "Preface," in: Chandra (1976).
- BL/T (1965): G.M. Bongard-Levin and E.N.Tyomkin, "Fragment of an unknown manuscript of the *Saddharmapuṇḍarīka* from the N.F. Petrovsky collection," *Indo Iranian Journal* VIII-4, pp. 268-277.
- BL/VD (1986): G.M. Bongard-Levin and M.I.Vorobyova-Desyatovskaya, *Indian Texts from Central Asia*, Leningrad Manuscript Collection (Bibliographia Philologica Buddhica, Series Minor V), Tokyo 1986.
- Boucher (1996): Daniel Boucher, *Buddhist Translation Procedures in Third-Century China: A Study of Dharmarakṣa and His Translation Idiom* (Dissertation), University of Pennsylvania 1996.
- Burnouf (1852): Eugène Burnouf, *Le Lotus de la Bonne Loi*, Paris 1852 (repr. 1989).

- Chandra (1976): Lokesh Chandra, *Saddharma-puṇḍarīka-sūtra Kashgar Manuscript*(Śata-piṭaka Series 229), Tokyo 1976 (repr. 1977).
- DLSM: Institute for the Comprehensive study of Lotus Sutra (Rissho University), *Data-base of Valuable Lotus Sūtra Manuscripts* (Microfilm materials held in the Comprehensive Study of Lotus Sutra) (立正大学法華經文化研究所『法華經関係稀覯資料集成データベース』立正大学法華經文化研究所蔵マイクロフィルム資料) Vols. I - IV, Rissho University, Tokyo 2003.
- Dutt (1939): Nalinaksha Dutt (ed.), *Gilgit Manuscripts*, vol. 1, Srinagar 1939.
- Dutt (1953): Nalinaksha Dutt (ed.), *Saddharmapuṇḍarikasūtram*, with N. D. Mironov's Readings from Central Asian MSS. (Bibliotheca Indica. A Collection of Oriental Works, Work No. 276, Issue No. 1565), Asiatic Society, Calcutta 1953 (repr. 1986).
- Edgerton (1953): Franklin Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar, Dictionary, and Reader*, Yale University Press, New Haven 1953.
- Ejima (1985-93): Yasunori Ejima et al (eds.), *Index to the Saddharmapuṇḍarikasūtra: Sanskrit, Tibetan, Chinese*, Fasc. I - XI, Reiyukai, Tokyo 1985-93.
- Ejima (1998): Yasunori Ejima et al (eds.), *Tibetan - Sanskrit Word Index to the Saddharmapuṇḍarikasūtra*, Reiyukai, Tokyo 1998.
- Gnoli (1987): Raniero Gnoli, "The Gilgit Manuscript of the *Saddharmapuṇḍarīka sūtram*," in: G. Gnoli et L. Lanciotti (eds.), *Orientalia Iosephi Tucci Memoriae Dicata* (Serie Orientale Roma LVI-2), pp. 533+plates I-XX, Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Roma 1977.
- Itoh (1993): *Comprehensive Index to Wogihara and Tsuchida's Saddharma puṇḍarikasūtram*, Benseisya, Tokyo 1993.
- Karashima (1992): Seishi Karashima, *The Textual Study of the Chinese Versions of the Saddharmapuṇḍarikasūtra*, Sankibo, Tokyo 1992.
- Karashima (1998): Seishi Karashima, *A Glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra*, 『正法華經詞典』(Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica I), The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University,

Tokyo 1998.

Karashima (2001): Seishi Karashima, *A Glossary of Kumārajīva's Translation of the Lotus Sutra*, 『妙法蓮華經詞典』 (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica IV), The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University, Tokyo 2001.

Karashima (2003-06): Seishi Karashima, "A Trilingual Edition of the Lotus Sutra: New editions of the Sanskrit, Tibetan and Chinese versions," (1) - (4), ARIRIAB 6-9, 2003-06.

Karashima (2006a): Seishi Karashima, "The Saddharmapuṇḍarikasūtra Manuscript from Farhād-Beg in the Stein Collection (1)," in: Seishi Karashima and Klaus Wille (eds.), *Buddhist Manuscripts from Central Asia: The British Library Sanskrit Fragments*, vol. 1, pp. 155 - 172, 5 plates, Tokyo 2006.

Kawaguchi/ Ikeda (1926): Ekai Kawaguchi and Chotatsu Ikeda, *Saddharmapuṇḍarikam nāma [ma]hāyānasūtram*, Tokyo 1926 (repr. 1956).

Kern (1884): H. Kern, *The Saddharmapuṇḍarikasūtra, or The Lotus of the True Law* (Sacred Books of the East XXI), Clarendon Press, Oxford 1884.

Kubo/ Yuyama (1993): Kubo Tsugunari and Yuyama Akira (trs.), *The Lotus Sutra* (Bukkyo Dendo Kyokai English Tripiṭaka 13-I), Numata Center for Buddhist Translation and Research, Berkeley 1993.

Lüders (1916): Heinrich Lüders (ed.), "Miscellaneous Fragments," in: *Manuscript Remains of Found in Eastern Turkestan, Facsimiles with Transcripts Translations and Notes*, vol. 1 (Bibliotheca Indo Buddhica No. 48), pp. 139-166 (Section 1, Saddharmapuṇḍarika, Hoernle MSS., No. 148, SA. 22-25 and Section 2, Another Fragment of the Saddharmapuṇḍarika, Hoernle MSS., No. 142, SB. 12), Oxford 1916.

LMS (1): Jiang Zhongxin (ed.), *Sanskrit Lotus Sutra Fragments from the Lüshun Museum Collection, Facsimile Edition and Romanized Text*, Lüshun Museum・Soka Gakkai (蔣忠新編『旅順博物館所藏梵文法華經斷簡 写真版及びローマ字版』旅順博物館・創価学会) 1997.

- LMS (2-1): *Lotus Sutra Manuscript from the National Archives of Nepal* (No. 4-21), Facsimile Edition (Lotus Sutra Manuscript Series 2-1) (『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華經写本 (No. 4-21) 写真版』), Soka Gakkai, Tokyo 1998.
- LMS (2-2/3): *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the National Archives of Nepal* (No. 4-21), Romanized Text 1, 2 (Lotus Sutra Manuscript Series 2-2, 2-3) (『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華經写本 (No. 4-21) ローマ字版』 1・2), Soka Gakkai, Tokyo 2001/ 2004.
- LMS (3): Klaus Wille (ed.), *Fragments of a Manuscript of the Saddharmapundarikasūtra from Khādaliq*, Soka Gakkai, Tokyo 2000.
- LMS (4): *Sanskrit Lotus Sutra Manuscripts from Cambridge University Library (Add. 1682 and Add. 1683)*, Facsimile Edition (Lotus Sutra Manuscript Series 4) (『ケンブリッジ大学図書館所蔵梵文法華經写本 (Add. 1682およびAdd 1683): 写真版』), Soka Gakkai, Tokyo 2002.
- LMS (5): Haruaki Kotsuki (ed.), *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from University of Tokyo General Library* (No. 414), Romanized Text (Lotus Sutra Manuscript Series 5) (小槻晴明 (編)『東京大学総合図書館所蔵梵文法華經写本 (No. 414) ローマ字版』), Soka Gakkai, Tokyo 2003.
- MLB(1984): *A Sanskrit Palmleaf Manuscripts kept in the Library of the Nationalities Culture Palace*, No. 1, China Social Sciences Publishing House, Beijing 1984. (『民族文化宮図書館蔵梵文貝葉写本之一 妙法蓮華經』(影印本) 北京・中国社会科学出版社 1984.)
- MLB (1988): *A Sanskrit Manuscript of Saddharmapundarikasūtra kept in the Library of the Cultural Palace of the Nationalities, Beijing*. Romanized Text, edited and annotated by Jiang Zhongxin with the Preface by Ji Xianlin, China Social Sciences Publishing House, Beijing 1988. (蔣忠新 (編著)『民族文化宮図書館蔵・梵文《妙法蓮華經》写本 (拉丁字母転写本)』北京・中国社会科学出版社 1988.)
- Mironov (1927): Nikolai D. Mironov, "Buddhist Miscellanea," in: *JRAS* 1927, pp. 241-279, 1927.
- Mochizuki (1998): Kaie Mochizuki, "The Bibliographical List of the Recent Studies on the *Saddharmapundarikasūtra* (private edition),"

Minobu 1998.

Nakamura (1980): Hajime Nakamura, *Indian Buddhism*, Osaka 1980.

Poussin (1911): Louis de la Vallée Poussin, "Documents Sanscrits de la Seconde Collection," in: *JRAS* 1911, pp. 1067-77, 1911.

Nattier (2003): *A Few Good Men: The Bodhisattva Path according to The Inquiry of Ugra (Ugraparipṛcchā)*, University of Hawai'i Press, Honolulu 2003.

Salomon (1999): Richard Salomon, *Ancient Buddhist Scrolls from Gandhāra: The British Library Kharoṣṭhī Fragments*, University of Washington Press, Seattle 1999.

SMS: *Sanskrit Manuscripts of Saddharmapuṇḍarīka-sūtra, Collected from Nepal, Kashmir and Central Asia* (『梵文法華經写本集成』), I-XII, Tokyo 1977-82.

SMSR I, II: Tsukamoto, Taga, Mitomo, Yamazaki (eds.), *Sanskrit Manuscripts of Saddharmapuṇḍarīkasūtra, Collected from Nepal, Kashmir and Central Asia. Romanized Text and Index*, I · II, The Society for the Study of Saddharmapuṇḍarīka Manuscripts (塚本啓祥・田賀龍彦・三友量順・山崎守一 (編) 『梵文法華經写本集成 (ローマ字本／索引)』 I · II, 梵文法華經研究会), Tokyo 1986-88.

Toda (1977-78): Hirofumi Toda, *Saddharmapuṇḍarīkasūtra Kashgar Manuscript*, 『徳島大学教養部倫理学科紀要』 I-V, 1977-1978. (Toda (1981), pp. 1 - 225 に再録。)

Toda (1978): Hirofumi Toda, *Saddharmapuṇḍarīkasūtra Farhād Beg Manuscript*, 『徳島大学教養部倫理学科紀要』 IV-V, 1978. (Toda 1981, pp. 227 - 258 に再録。)

Toda (1979): Hirofumi Toda, "Saddharmapuṇḍarīkasūtra Gilgit Manuscripts (Groups B and C)," 『徳島大学教養部紀要 (人文・社会科学)』 第14巻、pp. 249-304, 徳島1979.

Toda (1980): Hirofumi Toda, *Note on the Kashgar Manuscript of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra* (Bibliographia Philologica Buddhica, Series Minor II), Tokyo 1980.

Toda (1980-85): Hirofumi Toda, "Saddharmapuṇḍarīkasūtra, Nepalese Manuscript (K')," 『徳島大学教養部倫理学科紀要』 VIII-XI, 徳島 1980-85.

Toda (1981): Hirofumi Toda, *Saddharmapuṇḍarīkasūtra, Central Asian*

Manuscripts Romanized Text, Tokushima 1981.

- Toda (1984): Hirofumi Toda, "A Classification of the Nepalese Manuscripts of the Saddharmapuṇḍarīka sūtra (1)," 『徳島大学教養部紀要 (人文・社会科学)』 19, pp. 211 - 256, 1984.
- Toda (1985-93): Hirofumi Toda, "A Classification of the Nepalese Manuscripts of the Saddharmapuṇḍarīka sūtra (2) - (10)," 『徳島大学教養部紀要 (人文・社会科学)』 20-28, 1985-93.
- Toda (1988): Hirofumi Toda, "Saddharmapuṇḍarīkasūtra, Gilgit Manuscript (Tucci's Collection), Group C," 『徳島大学教養部倫理学科紀要』 XV, pp. 1-19, 徳島1988.
- Toda (1989-91): Hirofumi Toda, *Saddharmapuṇḍarīkasūtra Nepalese Manuscript* (北京民族文化宮図書館蔵) 『徳島大学教養部倫理学科紀要』 XVII-XXI, Tokushima 1989-1991.
- Toda (1994-99): Hirofumi Toda, "A Classification of the Nepalese Manuscripts of the Saddharmapuṇḍarīka sūtra (11) - (16)," 『徳島大学総合科学部 人間社会文化研究』 1-6, 1994-99.
- Toda (2002a): Hirofumi Toda, *Hirofumi Toda Collected Papers* (CD-Rom), University of Tokushima, Kyoiku Shuppan Center Co., Tokushima 2002.
- Toda (2002b): Hirofumi Toda, "Saddharmapuṇḍarīkasūtra," in: Jens Braarvig et al (eds.), *Manuscripts in the Schoyen Collection III*, Buddhist Manuscripts, volume II, pp. 69 - 95, Oslo 2002.
- Vaidya (1960): P. L. Vaidya, *Saddharmapuṇḍarīkasūtra* (Buddhist Sanskrit Texts 6), Mithila Institute of Post-Graduate studies and Research in Sanskrit Learning, Darbhanga 1960.
- Vira/ Chandra (1974): Raghu Vira and Lokesh Chandra (eds.), *Gilgit Buddhist Manuscripts of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra*, Parts 9-10 (Śatapīṭaka Series X, 9-10), New Delhi 1974.
- Vogel (1974): Claus Vogel, "The Dated Nepalese Manuscripts of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra," *Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen I. Philologisch-historische Klasse*, Jahrgang 1974, Nr. 5, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, Göttingen 1974.
- von Hinüber (1982): Oskar von Hinüber, *A New Fragmentary Gilgit Manuscript of the Saddharma puṇḍarīkasūtra*, Reiyukai,

Tokyo 1982.

- von Hinüber (1995): Oskar von Hinüber, "(Anzeigen) Ejima, Yasunori: *Index to the Saddharmapuṇḍarikasūtra*. Sanskrit, Tibetan, Chinese. Fasc. VIII-XI (*bauddha-hrasvakaya*)," in: *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie*, Band XXXIX, pp. 252-254, Wien 1995.
- Watanabe (1972/75): Shoko Watanabe (ed.), *Saddharmapuṇḍarīka Manuscripts Found in Gilgit, Part I, II*, Reiyukai, Tokyo 1972, 75 (repr. 1982).
- Wille (1998): Klaus Wille, "Weitere kleine *Saddharmapuṇḍarikasūtra*-Fragmente aus der Sammlung Hoernle (London)," in: Paul Harrison and Gregory Schopen (eds.), *Sūryacandrāya* (Indica et Tibetica 35), pp. 241-256, Swisttal- Odendorf 1998.
- Wille (2001): Klaus Wille, "The Sanskrit *Saddharmapuṇḍarikasūtra* fragment in the Mannerheim collection (Helsinki)," in: ARIRIAB 4, pp. 43-52 and 1 plate, 2001.
- Wogihara/ Tsuchida (1934-35): Wogihara Unrai and Tsuchida Katsumi (ed.), *Saddharmapuṇḍarikasūtra*, Tokyo 1934-35 .
- Yuyama (1966): Akira Yuyama, "Supplementary remarks on 'Fragment of an unknown manuscript of the *Saddharmapuṇḍarīka* from the N. F. Petrovsky collection' by G. M. Bongard-Levin and E.N.Tyomkin," *Indo Iranian Journal* IX-2, pp-85-112.
- Yuyama (1970): Akira Yuyama, *A Bibliography of the Sanskrit Texts of the Saddharmapuṇḍarikasūtra*, Canberra 1970.
- Yuyama (1987): Akira Yuyama, "Miscellaneous Remarks on the Lotus Sutra," in: *Takasaki Jikido Hakushi Kanrehi Kinen Ronshu: Indogaku Bukkyogaku Ronshu* [Collected Papers on Indian and Buddhist Studies: A Volume Dedicated to Dr. Jikido Takasaki on the Occasion of His 60th Birthday], pp. 720 (119) - 712 (127), Shunjusha, Tokyo 1987.
- Yuyama (2000): Akira Yuyama, *Eugène Burnouf, The Background to his Research into the Lotus Sutra* (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica III), Tokyo 2000.
- Yuyama (2001): Akira Yuyama, "Random Remarks on and around the Mannerheim Fragment of the *Saddharma- puṇḍarikasūtra*,"

in: ARIRIAB 4, pp. 53-69, 2001.

Yuyama/Toda (1980): Akira Yuyama and Hirofumi Toda, *The Huntington Fragment F of the Saddharmapundarikasūtra* (Studia Philologica Buddhica Occasional Paper Series II), Tokyo 1980.

<和文>

岩本 (1962): 岩本裕「解題（一）『法華經』のサンスクリット語原典」坂本幸男・岩本裕（訳注）『法華經』上、pp. 391-422, 岩波書店 1962.

岩本 (1974): 岩本裕（訳）『仏教聖典選第三卷大乘經典（一）』読売新聞社 1974.

金倉 (1978): 金倉圓照「法華經研究の昨今」『日本学士院紀要』35-2, pp. 103-112.

辛嶋 (1997): 辛嶋静志「初期大乘仏典の文献学的研究への新しい視点」『仏教研究』26, pp. 157-176, 1997.

辛嶋 (1998): 辛嶋静志「法華經梵本の原典批判覚書」ARIRIAB 1, pp. 49-68, 1998.

河野 (2006): 河野訓『初期漢訳仏典の研究---竺法護を中心として---』皇學館大学出版部（伊勢）2006.

久留宮 (1976): 久留宮圓秀「ギルギット出土 法華經写本の写真版」『法華文化研究』2, pp. 45-57.

小槻 (2005): 小槻晴明「『ケルン・南條本』再考」『東洋哲学研究所紀要』21, pp.204 (57) - 194 (67).

真田 (1961): 真田有美「大谷探検隊将来梵文仏典資料」（西域文化研究会（編）『中央アジア古代語文獻 西域文化研究第四』所収、pp. 49-118, 3 plates）法蔵館 1961.

真田・清田 (1961): 真田有美・清田寂雲「ペトロフスキー本（Petrovskij MSS.）法華經梵本の研究＜序偈より法師品まで＞」（西域文化研究会（編）『中央アジア古代語文獻 西域文化研究第四』所収、pp. 119-170, 3 plates）法蔵館 1961.

蔣 (1999): 蔣忠新「梵文法華經のテキストに関する若干の問題」『東洋學術研究』38-1, pp. 184(1) - 170(15), 1999.

田村 (1972): 田村芳朗「法華經の再発掘」『三蔵』27, 大東出版社1972.

塚本 (1972): 塚本啓祥「大智度論と法華經：成立と翻訳の問題に関連して」（坂本幸男（編）『法華經の中国的展開』（法華文化研究IV）所収、pp. 611-660）平楽寺書店 1972.

塚本 (1986): 塚本啓祥「序論 梵文法華經写本の研究」SMSR 1: 9-33, 63-81, 1986.

戸田 (1984): 戸田宏文「梵文法華經考：その二」『仏教学』17, pp. (1) - (21), 1984.

戸田 (1997): 戸田宏文「法華經原典研究の現況と課題」『仏教大学総合研究所報』pp.

法華經の梵語写本 発見・研究史概観（石田）

13-16, 1997.

- 本田（1949）：本田博士還暦記念梵本法華經刊行会『西域出土梵本法華經』京都 1949.
- 松田（1999）：松田和信「ノルウェーのスコイエン・コレクションと梵文法華經断簡の
発見」『東洋学术研究』38-1, pp. 4-19, 1999.
- 望月（1983）：望月良晃「法華經の成立史」（『講座大乘仏教4 法華思想』所収、pp. 47-
78）春秋社1983.
- 湯山（1972）：湯山明「法華經梵本拾遺(1)」『法華文化』19, pp. 7(1)-5(3), 1972.
- 湯山（1994）：湯山明「ビュルヌーフの法華經研究の学史的周辺：近代印度仏教学の最
初期を飾る人々」『法華文化研究』20, pp. (37)-(106), 1994.
- 湯山（1998）：湯山明「法華經の文献学的研究課題」ARIRIAB 1, pp. 29-47, 1998.
- 山田（1959）：山田龍城『梵語仏典の諸文献』平楽寺書店 1959.
- 渡辺（1966）：渡辺照宏「法華經梵語諸本の比較研究序説 実験三例」『金倉博士古稀記
念 印度学仏教学論集』pp. 359-389, 平楽寺書店 1966 （『渡辺照宏仏
教学論集』pp. 253-282, 筑摩書房 1982に再録）.
- 渡辺（1967）：渡辺照宏「詳解 新訳法華經（第15回）」『大法輪』34, pp. 72-79, 1967.
- 渡辺（1970）：渡辺照宏「法華經原典の成立に関する一考察」（金倉圓照（編）『法華經
の成立と展開』所収、pp. 77 - 110）平楽寺書店 1970（『渡辺照宏仏教
学論集』pp. 303-329, 筑摩書房 1982に再録）.
- 渡辺（1974）：渡辺照宏「幻の写本 法華經ギルギット本：法華經原典最古の写本」
『大法輪』41, pp. 94-101, 1974.

〈興隆学林専門学校助教授・立正大学非常勤講師〉